

- 『和英語林集成』初版「和英」「英和」両部における語形のゆれ—連濁現象について—  
加藤正信編『日本語の歴史地理構造』（明治書院） pp. 234-248
- 1997.9.19 影山太郎・他  
「文法論と形態論」『岩波講座言語の科学 3 単語と辞書』（岩波書店） pp. 1-51  
☆ p. 22 「連濁」「連濁規則」。
- 1997.9.30 高山知明  
「漢語形態素の連濁のあり方について」『香川大学国文学研究』22（香川大学国文学会）  
pp. 26-34
- 1997.10.1 石井 博  
「〈荒川〉の〈川〉は何故連濁しないのか」『語研フォーラム』7（早稲田大学語学教育研  
究所） pp. 99-108
- 1997.12.20 谷脇康子  
「日本語の複合形容詞における連濁現象」『人文論究』47-3（関西学院大学人文学会）  
pp. 225-246
- 1997.12.22 沼本克明  
『日本漢字音の歴史的研究—體系と表記をめぐって—』（武蔵野書院） ☆ p. 892 「連濁声  
点」。 p. 850 注(30)「プロソディー」。
- 1997.12.25 吉野政治  
「時々トキトキとトキドキー」『同志社女子大学学術年報』第48巻-IV（同志社女子大  
学） pp. 211-227 縦組 pp. 1-18 ☆連濁形と非連濁形。
- 1997 Ito Junko & Mester (Ralf Armin Mester)  
“Correspondence and compositionarity: The Ga-gyo variation in Japanese phonology”  
IGGY Roca (ed.) *Derivations and Constraints in Phonology* (CLARENDON PRESS·  
OXFORD) pp. 419-463 ☆ガ行鼻音。
- 1997 Rice, Keren  
“Japanese NC Clusters and the Redundancy of Postnasal Voicing” *Linguistic Inquiry*  
28 pp. 541-551
- 1997 KEIICHIRO SUZUKI  
“NN: Rendaku and Licensing Paradox” *Japanese/Korean Linguistics Volume 6*  
(Stanford Linguistic association) pp. 215-228
- 1998.1 佐々木勇  
「三重県専修寺蔵『三帖和讃』における字音の連濁」『広島大学学校教育学部紀要』第II  
部第20巻（広島大学学校教育学部） pp. 206-197（縦組 pp. 1-10） ☆ p. 202 「去声の後  
での連濁例が多いことが確認される」「鼻音の後で連濁しない例について」。
- 1998.2.25 迫野虔徳

- 『文献方言史研究』（清文堂出版） 迫野虔徳（1989）を「促音と撥音の相関—撥音の後のバ行音」・（1991）を「方言特徴の設立—「中濁」考—」と改題のうえ再録。
- 1998.2.28 窪菌晴夫  
「音韻構造の普遍性と個別性」 日英語比較選書10『音韻構造とアクセント』第I部（研究社） pp. 2-105 ☆「連濁」…pp. 59-65 p. 81.83.102.103。「ライマンの法則」…p. 62.63.65.81.83。
- 1998.2.28 太田 聡  
「音韻過程と韻律構造の諸相」 日英比較選書10『音韻構造とアクセント』第II部（研究社） pp. 110-224 ☆「連濁」…p. 121.124-28.130.133-35.137.140.142.143.146.149.150。「ライマンの法則」 p. 127.130。ライマンの法則を OCP で説明。
- 1998.5.28 窪菌晴夫  
「音韻論」『岩波講座言語の科学2 音声』第2章（岩波書店） pp. 53-91 ☆「連濁」…p. 59.60-65.81.83。「ライマンの法則」…p. 62.63.65.81.83。
- 1998 TAM KOZMAN  
“The Psychological Status of Syntactic on Rendaku” *Japanese/Korean Linguistics* 8 (Stanford Linguistic association) pp. 107-120
- 1999.1.30 馬淵和夫  
「上代語の清濁に関するひとつの見解」『古代日本語の姿』（武蔵野書院） pp. 153-171 ☆馬淵和夫（1965）を再録。p. 170「なお、東国語と中央語とで、複合語の清濁に若干の相異があったであろうということは透氏ペ五三九にもその意見がみえている」。
- 1999.3.31 戸田綾子  
「現代和語の連濁—語構成から—」『日本語・日本文化研究』第6号（京都外国語大学留学生別科） pp. 72-81 ☆名詞+動詞の連用形転成名詞の連濁率を示す。
- 1999.3 高山知明  
借用語の連濁・硬音化について1 『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書』（筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織編）
- 1999.7.30 大槻 信  
「にごり」『国語国文研究』第112号（北海道大学国語国文学会） pp. 51-61 横組 pp. 10-20 ☆p. 61「日本語における「にごり」とは何であるかを解明するため、上代日本語を対象として、語彙の音節構造を分析する事により、すべての「にごり」が二次的な生成に係る可能性を示す」。
- 1999.11.5 鈴木孝夫  
『日本語と外国語』鈴木孝夫著作集5（岩波書店） pp. 324-337 ☆鈴木孝夫（1962）を採録。論文冒頭に著者による解説あり。
- 1999 S. E. Fukuda and S. Fukuda

The operation of Rendaku in the Japanese specifically language-impaired Cross-linguistic Evidence for Genetic Dysphasia (Folia Phoniatica Et Logopaedica Vol. 51, No. 1 (1999) Gopnik, Myrna S Karger AG)

## 2000～2005

2000.2.25 Takanori Hirano (平野尊識)

“Phonorogical structure and sequential voicing—with special attention to the names of rivers—” 『山口大学文学会誌』 50 (山口大学文学会) pp. 81-85

2000.3.5 肥爪周二

「日本韻学用語攷(一)—清濁—」 『茨城大学人文学部紀要 人文科学論集』 33 (茨城大学人文学部) pp. 17-38 ☆ p. 21 「狭義の連濁現象」。

2000.3.9 尾形エリカ・林良子・今泉敏・他

「複合語の連濁・アクセント規則の認知機構」 『電子情報通信学会技術研究報告』 99号(通号678号) (電子情報通信学会) pp. 17-24

2000.3.25 荒木雅實

「連濁について」 『拓殖大学日本語紀要』 第10号 (拓殖大学留学生別科) pp. 103-109

2000.3 原口庄輔

「新「連濁」論の試み」 (神田外語大学 COE 平成11年度 COE 形成基礎研究費成果報告 (4) (課題番号08COE1001) 「先端的言語理論の構築とその多角的実証 (4-B)—ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る—」 (神田外語大学) pp. 715-732

2000.9.18 高山倫明

「日本語音韻史の方法」 『日本語学』 19-11(通巻228号) 9月臨時増刊号 (明治書院) pp. 16-25 ☆ 「日本語史研究入門」 1章 分野別研究法。音韻史連濁…p. 18,21。

2000.10.31 浅田健太郎

「日本語における半濁音化をめぐる問題—声明資料を手掛かりとして—」 『鎌倉時代語研究』 第23輯 (武蔵野書院) pp. 816-835 ☆ p. 826 「覚如版の連濁の実態」。 p. 828 「緝興版の連濁の実態と覚如版との比較」。

2000.10 伊東潤一

「表記史よりみた萬葉集の清濁表記—巻五および巻二十(家持歌)を中心に—」 『二松学舎大学人文論叢』 65 (二松学舎大学人文学会) pp. 1-26 ☆ 「あかごま」。

2000 KAZUTOSHI OHNO

“The Lexical Nature of Rendaku” *Japanese/Korean Linguistics* Volume 9 (CSLI Publication) pp. 151-164

2000 J.MARSHALL UNGER

“Rendaku and Proto-Japanese Accent Classes” *Japanese/Korean Linguistics* Volume

9 (CSLI Publication) pp. 17-30

2001.1.1 金田一春彦

『日本語音韻音調史の研究』（吉川弘文館） pp. 334-368 ☆金田一春彦（1976）を再録。

2001.4.30 高山倫明

「連濁の音声学的蓋然性」『筑紫語学論叢 奥村三雄教授追悼記念論文集』（迫野虔徳風間書房） pp. 74-89 ☆ p. 83…「語構成のための形態音韻論的現象という印象がはるかに強い」。近年の連濁研究を批判的に紹介。

2001.4.30 岡島昭浩

「半濁音名義考」『筑紫語学論叢 奥村三雄教授追悼記念論文集』（迫野虔徳編 風間書房） pp. 47-73 ☆「連濁」…p. 60.61.64

2001 Shosuke Haraguchi

“On Rendaku”『音韻研究 Phonological Studies』4（日本音韻論学会編 開拓社） pp. 9-32 ☆キーワード Rendaku; Nasal Obstruent Voicing; Assimilative Voicing; OT

2002.3.10 安田尚道

「シ(四)からヨンへー4を表す言い方の変遷一」『青山語文』第32号（青山学院大学日本文学会） pp. 124-138 ☆「ヨン」の成立は近世。

2002.3.10 肥爪周二

「ハ行子音をめぐる四種の「有声化」」『人文学科論集』（茨城大学人文学部紀要）第37号（茨城大学人文学部） pp. 97-118 ☆ pp. 115「以上のように、濁音の起源を、語の内部構造の標示（つまり連濁は、結合標示と境界標示を両立する形式として出発したと考える）に求めるならば、濁音が持っている特性、すなわち「語頭に立たない」「単純語中に共存しない」「(ストレス) アクセントに似た性質を持つ」などの事実や、かつて清濁が「非鼻音／鼻音」という類例を指摘しがたい対立をなしていたらしいことについても、自ずと理解が可能になってくる」。

2002.3.31 三宅知宏

「後の内部関係と音韻現象—形態論と音韻論の接点II—」『国文鶴見』第36号（鶴見大学日本文学界編） pp. 79-70（横組1-10） ☆ p. 72「複合語における、「格関係」「等位関係」「修飾関係」という内部関係が、「連濁」及び「アクセントの一体化」という音韻現象に与える制約について」の考察。

2002.7.29 岩岡登代子

「連濁と日本語」『文学』第3巻第4号（岩波書店） pp. 231-240

2002.11.1 柳田征司

「濁音の前の鼻母音—その成立・衰退と音便—」『国語と国文学』79-11(通巻948号)（東京大学国語国文学会） pp. 1-10 ☆ p. 10「濁音の前の鼻母音の成立も衰退もともに音便が原因であると考えられるようになった」。

2002.11.16 Suzy E. Fukuda

“The Acquisition of Rendaku: a Linguistic Investigation” 『青山学院大学全学共通科目 論集』第43号（青山学院大学） pp. 15-57 ☆「連濁」の獲得に関する言語学的考察。p. 59和文要旨。

2002.12.20 丹保健一

「接辞的造語成分「中(チュウ)」「中(ジュウ)」の使い分けについての覚え書き—「午前ちゅう」「午後じゅう」「夏じゅう」を中心に— 『国語論究 第10集 現代日本語の文法研究』(明治書院) pp. 288-317

2002 JUNKO ITO AND ARMIN MESTER

“The Phonological Lexicon” Edited by Natsuko Tsujimura *Japanese Linguistics* (Blacwell Publishing) pp. 62-100

2002 S. -Y. KURODA

“Rendaku” *Japanese/Korean Linguistics* Volume 10 (CSLI Publication) pp. 337-350

2002 YOKO SUGIOKA

“Rendaku” *Japanese/Korean Linguistics* Volume 10 (CSLI Publication) ☆ p. 500  
…Rendaku

2003.3.31 鈴木 豊

「連濁研究の現在—ライマン以降の連濁研究—」 『早稲田日本語研究』11（早稲田大学日本語学会） p. 72 ☆早稲田大学日本語学会発表の要旨。2002.12.7 発表。

2003.4.1 肥爪周二

「清濁分化と促音・撥音」 『国語学』第54巻2号（国語学会） 縦書 pp. 1-14

2003.4.30 高山倫明

「日本語音韻史研究とその課題」 『音声研究』第7巻第1号（日本音声学会） pp. 35-46  
☆ p. 45連濁の起源。

2003.5.2 前田広幸

「生成音韻論・最適性理論による日本語史研究」 『国語学会2003年度春季大会予稿集』（国語学会） pp. 13-20

2003.5.2 高山倫明

「表記史の中の音韻史—文献学と音声学を軸に—」 『国語学会2003年度春季大会予稿集』（国語学会） pp. 37-44

2003.5.16 安田尚道

「石塚龍麿の連濁論—『古言清濁考』を読む—」 訓点語学会第88回研究発表会発表資料  
☆ A4判5枚。

2003.6.1 高山知明

- 「現代日本語の音韻とその機能」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』第2章（朝倉書店）  
pp. 22-42
- 2003.6.1 久保智之  
「音韻研究の動向と展望2（現代語中心）」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』第13章（朝倉書店）
- 2003 March-June ERIC ROSEN  
Systematic Irregularity in Japanese Rendaku: How the Grammar Mediates Patterned Lexical Exceptions *Canadian Journal of Linguistics* 48-1/2 (Canadian Linguistic Association) pp. 17-3
- 2003.11.30 宮澤俊雅  
「字余りの変遷—平成15年春季上代文学会公開講演・概要並びに配布資料—」『上代文学』第91号（上代文学会）横組 pp. 1-31 ☆ p. 84「連濁における濁音不連続の法則も、長音節不連続の法則と言い換えることができます」。
- 2003 Junko Ito & Armin Mester  
*Japanese Morphophonemics Markedness and Word Structure* Linguistic Inquiry Monograph 41 (The MIT Press)
- 2003 米山明日香  
“A Study of Rendaku in Japanese Family Names” *Oliva* 10 (関東学院大学人文学会英語英米文学部会) pp. 85-113 ☆英文。
- 2004.3.15 鈴木 豊  
「連濁」の呼称が確立するまで—連濁研究前史—『国文学研究』142集（早稲田大学国文学会） pp. 124-134（横組 pp. 11-21）
- 2004.3.30 藤井貞和  
「清,「濁」,と懸け詞——耳を澄ませ ラララ 目を瞑れ」『東京大学大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻紀要』第11巻第1号（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻編） pp. 43-54
- 2004.3.31 三宅知宏  
「半濁音化」「促音化」と「枝分かれ制約」—形態論と音韻論の接点III—『国文鶴見』38（鶴見大学日本文学会） pp. 52-41（横組 pp. 1-12）
- 2004.3.31 蜂矢真郷  
「上代の清濁と語彙—オホ～・オボ～（イフ～・イブ～）を中心に—」『美夫君志』第68号（美夫君志会） pp. 1-13 ☆キーワード 濁音化 アクセント ハ行転呼音 オホ～・オボ～ イフ～・イブ～
- 2004.5.30 窪菌晴夫  
「音韻構造から見た単純語と合成語の境界」『文法と音声』IV（音声文法研究会） pp.

- 123-143
- 2004.5.30 前田広幸  
「最適性理論と日本語音韻史研究—体系的観点を導入した(前)鼻音化閉鎖音の分析を中心に—」『文法と音声』IV (音声文法研究会) pp. 161-179
- 2004.8.31 肥爪周二  
「結合標示と内部構造標示」『音声研究』8-2 (日本音声学会) pp. 5-13
- 2004.10.25 湯沢質幸・松崎寛  
「「一本, 二本, 三本」はなぜ「いっぽん, にほん, さんぽん」と読むのか? 【ハ行音の歴史の変遷】」『音声・音韻探究法—日本語音声へのいざない—』シリーズ〈日本語探究法〉3 (朝倉書店) pp. 91-101
- 2004.11. 李 文相  
「韓・日両言語における音韻添加—サイソリ化と連濁・促音化を中心に—」『萩国際大学論集』6-1 (萩国際大学) pp. 1-19
- 2004.12.6 大津由紀雄  
「大きな太鼓は「おおだいこ」連濁のはなし①」『探検! ことばの世界』新版 (ひつじ書房) pp. 44-49 ☆もと『探検! ことばの世界』(1996 NHK 出版)。
- 2004.12.6 大津由紀雄  
「「にせたぬきじる」と「にせだぬきじる」連濁のはなし②」『探検! ことばの世界』新版 (ひつじ書房) pp. 50-55 ☆もと『探検! ことばの世界』(1996 NHK 出版)。
- 2005.1.25 金田一春彦  
『金田一春彦著作集 第6巻』(玉川大学出版部) ☆金田一春彦(1976)を採録。
- 2005.2.20 鈴木 豊  
「ライマンの法則の例外について—連濁形「一バシゴ(梯子)」を後部成素とする複合語を中心に—」『文京学院大学外国語学部 文京学院短期大学 紀要』4 (文京学院大学総合研究所) pp. 249-265
- 2005.8.26 Timothy J. Vance  
“Right branch or Head: What Difference Does It Make?” Phonology Forum 2005 発表資料 ☆A4版7枚。
- 2005.8.26 伊原睦子・村田忠男  
「日本語の連濁に関するいくつかの実験」Phonology Forum 2005 発表資料 ☆A4版7ページ。英文タイトル“Some Experiments on Sequential Voicing”。
- 2005.8.26 Kohei Nishimura (西村康平)  
“Lyman’s Law in Loanwords” Phonology Forum 2005 発表資料 ☆A4版6枚(8ページ, 付表2枚)。
- 2005.8.26 Kazutaka Kurusu (栗栖和孝)

“Derived Environment Effect in Yamato-Japanese Voicing Phonology” Phonology  
Forum 2005 発表資料 ☆ A4 版 4 枚 (8 ページ)。

2005.9.15 ティモシー J バンス

日本語教育における連濁 『言語学と日本語教育』IV (くろしお出版) pp. 1-11

## 著者別索引

### 凡 例

- (1) 著者名と発行年を ( ) 内に示した。同一発行年の論文がある場合は発行月日の早い順に発行年に続けて a・b・c…を付して区別した。
- (2) 配列はまず和文・英文の順とし、和文の場合は著者名の五十音順、英文の場合は著者名のアルファベット順とした。著者名は論文に用いられた表記のとおりとした。
- (3) 英文と和文の両方に同一著者名がある場合はそれぞれ→をもって示した。

#### 【あ行】

秋永一枝(1976)・(1977a)・(1977b)  
浅田健太朗(2000)  
荒木雅實(2000)  
有坂秀世(1955)  
石井 博(1997)  
石倉俊一郎(1997)  
伊丹 昇(1970)  
伊東潤一(2000)  
犬飼 隆(1976)・(1977)・(1992)  
伊原睦子・村田忠男(2005)  
今泉忠義(1951)・(1968)  
岩岡登代子(2002)  
内海 淳(1996)  
江口泰生(1993)・(1994)  
榎木久薫(1987)  
遠藤邦基(1966)・(1981)・(1982)・(1984)・  
(1989a)・(1989b)・(1989c)  
太田 聡(1996)・(1998)  
大津由紀雄(1996a)・(1996b)・(2004a)・(2004  
b)→Otu Yukio  
大槻 信(1999)  
大坪一夫(1982)  
大野 透(1962)・(1977)  
岡島昭浩(2001)  
尾形エリカ・林良子・今泉敏・他(2000)

奥村三雄(1952)・(1955)・(1964)・(1980)・  
(1984)

小倉進平(1910a)・(1910b)・(1916)・(1920)・  
(1980)

小倉 肇(1990)

#### 【か行】

柏谷嘉弘(1980)

影山太郎(1993)

影山太郎・他(1997)

亀井 孝(1954)・(1970)・(1981)・(1986)・  
(1989)

亀井孝・他(1966)

川上 泰(1990)

川原悦子(1989)

菊沢李生(1935)

菊田紀郎(1971)・(1977)

菊池 悟(1997)

木田章義(1978)・(1979)・(1980)

木部暢子(1978)・(1979)

木村秀次(1972)・(1983)

金田一京助(1932)・(1938)・(1992)

金田一春彦(1976)・(2001)・(2005)

久保智之(2003)

窪蘭晴夫(1995)・(1998a)・(1998b)・(2004)

河野 亮(1959)

小島正敏(1972)

五十郎(1972)

小林芳規(1970)・(1971)

小松英雄(1981)・(1993)

小松代融一(1973)

近藤政美(1959)

### 【さ行】

崔 殷熾(1984)・(1986)

齋賀秀夫(1976)

佐久間鼎(1919)

桜井茂治(1966)・(1967a)・(1967b)・(1972)・  
(1985)

迫野虔徳(1989)・(1991)・(1998)

佐々木勇(1998)

颯田琴次(1955)

佐藤大和(1983)・(1989)

塩田 昇(1987)

霜崎 実→Minoru Shimozaki

杉藤美代子(1965)・(1982)

鈴木一男(1964a)・(1964b)

鈴木孝夫(1962)・(1999)

鈴木 豊(1993)・(1997)・(2003)・(2004)・  
(2005)

### 【た行】

高橋正郎(1939)・(1939)

高山知明(1994a)・(1994b)・(1997)・(2003)

高山倫明(1992a)・(1992b)・(2000)・(2001)・  
(2003a)・(2003b)

橘 純一(1939)

谷脇康子(1997)

田野村忠温(1990)・(1992)

田村すゝ子(1971)

田村すゝ子・他(1976)

ティモシー J バンス→Timothy J. Vance

戸田綾子(1988)・(1994)・(1999)

豊島正之(1992a)(1992b)

### 【な行】

中川芳雄(1966)・(1971)・(1978a)・(1978b)・  
(1979a)・(1979b)

永田吉太郎(1932)

丹保健一(2002)

西田直敏(1979)

西宮一民(1990)

沼本克明(1972)・(1973)・(1982)・(1986)・  
(1988)・(1997)

野元菊雄(1958)

登坂俊子(1984)

### 【は行】

橋本進吉(1933)・(1950)

蜂矢真郷(1992)・(1993)・(1994)・(2004)

服部四郎(1957)・(1960)

濱田 敦(1952)・(1960a)・(1960b)・(1971)・  
(1983)・(1984)

早田輝洋(1977)・(1996)

原口庄輔(2000)→Shosuke Haraguchi

飛田良文(1966)・(1992)

肥爪周二(2000)・(2002)・(2003)・(2004)

平野尊識(1974)→Takanori Hirano

福島邦道(1981)

福永静哉(1955)・(1959)・(1963)

福田昆之(1984a)・(1984b)・(1984c)・  
(1984d)

藤井貞和(2004)

北条忠雄(1966)・(1976)・(1977)

E・D・ポリワールノフ(1976)

【ま行】

前田富禎(1977)  
前田広幸(2003)・(2004)  
増田 豊(1979)  
松浦陽子(1991)・(1993)  
松本 宙(1995)  
馬淵和夫(1971)・(1977)・(1996)・(1999)  
丸山林平(1967)・(1971)  
三宅武郎(1932)  
三宅知宏(2002)・(2004)  
宮澤俊雅(2003)  
宮良信詳(1996)  
村山七郎(1954)  
村山七郎・大林太良(1973)  
最上勝也(1990a)・(1990b)  
森重 敏(1980)  
森田 武(1974)・(1977)・(1985)  
森山 隆(1962)・(1967)・(1971a)・(1971b)・  
(1986)

【や行】

安田尚道(2002)・(2003)  
屋名池誠(1991)  
柳田征司(2002)  
山口佳紀(1982)・(1988)・(1989)  
山田孝雄(1904)  
湯沢質幸・松崎寛(2004)  
吉野政治(1997)  
米山明日香(2003)

【ら行】

李 文相(2004)

【無署名】

無署名(1954)・(1963)・(1966a)・(1966b)・  
(1967)・(1976)・(1992)・(1996)

【英文】

Benjamin Smith Lyman(1883)・(1894)  
Cook, Eung-Do(1991)  
EUNJOO HAN(1994)  
Gunther Wenck(1954)  
J. MARSHALL UNGER(2000)  
Junko Itô & Armin Mester(1986)・(1989)・  
(1996)・(1997)・(2002)・(2003)  
KAZUTOSHI OHNO(2000)  
→ Ohno, Kazutoshi  
KEIICHIRO SUZUKI(1997)  
Kazutaka Kurusu(栗栖和孝)(2005)  
Kohei Nishimura(西村康平)(2005)  
MacCawley, James D.(1968)  
Martin, Samuel(1952)  
Minoru Shimosaki(1993)  
Ohno, Kazutoshi(1997)  
Otu Yukio(1980)→大津由紀雄  
Ramsey, R. S. and Unger(1972)  
Rice, Keren(1997)  
S.-Y. KURODA(2002)  
Samuel E. Martin(1987)  
Sano M.(1982)  
S. E. Fukuda and S. Fukuda(1999)  
Shosuke Haraguchi(2001)→原口庄輔  
Suzy E. Fukuda(2002)  
TAM KOZMAN(1998)  
Takanori Hirano(2000)→平野尊識  
Takatsugu Oyakawa(1989)  
Timothy J. Vance(1980a)・(1980b)・

(1982) · (1987) · (2005a) · (2005b)  
Vance, Timothy J.(1979)

Vance, Timothy(1996)  
YOKO SUGIOKA(2002)

# 近代以降連濁研究文献目録（1883—2005）

鈴木 豊

表題に掲げた「近代以降連濁研究文献」とは時代的にはライマン（1883）から2005年9月までの研究を指す。ライマンの連濁研究を近代連濁研究の始まりと見なすのは、ライマンの研究の対象が連濁現象だけに絞られていること、連濁現象を実証的・総合的に考察していることが、それまでの研究と一線を画することによる。それ以前の連濁研究については鈴木豊（2004）を参照していただきたい。この文献目録は学術雑誌からの採録が中心であるが、その他に日本語研究の専門書の連濁に関する章や日本語研究関連辞典の「連濁」の項目などからも採録した。また、学会発表資料も採録したものがあつた。採るべきものが漏れていることもあつたが、連濁に関する研究文献の中には先行研究を十分に参照していないものも散見するので、完全とはい切れないこの目録の公表に踏み切ることとした。補訂版のために御教示を賜れば幸いである。

## 凡 例

- (1) 連濁について論じた論文および連濁についての詳しい記述や重要な指摘のある文献を採録した。
- (2) 配列は発表年月日の古い順とした。月日が不明のものは後ろに置いた。
- (3) 各文献は以下の書誌情報をもつ。
  - a) 発行年月日 b) 著者名 c) 「論文名」 d) 『所収雑誌・単行本名』 e) 巻-号
  - f) (発行所名) g) 掲載ページ h) 備考
- (4) 著者名は原論文のとおりとした。
- (5) 備考は必要と思われる場合に限り記した。
- (6) 原文の振り仮名は( )内に片仮名で示した。
- (7) 目録末尾に著者別索引を付した。

## ～1900

1883.5 Benjamin Smith Lyman

“On the Japanese Nigori of Composition” *Journal of the American Oriental Society*  
11 (The American Oriental Society) pp. cxlii-cxliii (142-143) ☆ボストンで行われたアメリカ東洋学会で口頭発表。ライマン（1894）による。Journal 11号の刊行は1885

年、内容は発表の記録であり、ライマン本人が執筆したものではない。

1894 Benjamin Smith Lyman

“The Change from Surd to Sonant in Japanese Compounds” *Oriental studies; a selection of the papers read before the Oriental club in Philadelphia* 1888-1894 (Oriental Club of Philadelphia Boston, Ginn & company) pp. 160-176 ☆小倉進平 (1910) (1916) は抄訳に近い紹介。屋名池誠 (1991) は全文の翻訳。岡島昭浩氏はホームページ上で全文の翻刻を公開。出典について、高山倫明 (1992) では PAPERS OF THE ORIENTAL CLUB, Ito and Mester (1986) ・他は *Oriental Studies of the Oriental Club of Philadelphia* (pp. 1-17) とする。横浜開港資料館蔵ブルームコレクション中の冊子ではタイトルはすべて大文字、表紙右隅に “From the “Oriental Studies” of the Oriental Club of Philadelphia.1894.” とあり、屋名池誠 (1991) の指摘するように別刷りと考えられる。ノンブルは 1-7。

#### 1901～1950

1904.8.10 山田孝雄

「連濁音の発生」『国学院雑誌』10-8 (国学院大学) pp. 33-43 ☆和語・漢語ともに対象として論じる。ライマン (1894) を参照せず。

1910.7.15 小倉進平

「ライマン氏の連濁論(上)」『国学院雑誌』16-7 (国学院大学) pp. 9-23 ☆小倉進平 (1916) は小改稿のうえ改題したもの。ライマン (1894) を抄訳のうえ紹介。『国学院雑誌』は1977年に復刻版あり。

1910.8.15 小倉進平

「ライマン氏の連濁論(下)」『国学院雑誌』16-8 (国学院大学) pp. 31-45 ☆小倉進平 (1916) は小改稿のうえ改題したもの。ライマン (1894) を抄訳のうえ紹介。『国学院雑誌』は1977年に復刻版あり。

1916.10.15 小倉進平

「連濁音に就いて」『朝鮮教育研究会雑誌』13 (朝鮮教育研究会) pp. 10-22 ☆小倉進平 (1920) に「国語の連濁音」と改題のうえ再録。ライマン (1894) を抄訳のうえ紹介。

1919.8.15 佐久間鼎

『国語の発音とアクセント』(同文館) ☆p. 120…連濁。

1920.12.15 小倉進平

「国語の連濁音」『国語及朝鮮語のため』二七 (ウツボヤ書籍店 [京城]) pp. 270-295 ☆小倉進平 (1910) に小改稿を加えたもの。小倉進平 (1980) に再録。

1932.3. 金田一京助

『増補国語音韻論』(刀江書院) ☆増補版は1935年刊。新訂増補版は1938年5月刊。

1932.12.10 三宅武郎

「濁音考」『音声の研究』第5輯（音声学協会） pp. 135-190 ☆『古事記伝』『古言清濁考』を高く評価。古代の濁音は鼻濁音。文末に「(以下次輯)」とあるも以降掲載なし。

1932.12.10 永田吉太郎

「表音文字としての仮名」『音声の研究』第5輯（音声学協会） pp. 135-190

1933.4.25 橋本進吉

「濁音」『日本文学大辞典』第2巻（新潮社） p. 459 ☆橋本進吉(1950)に再録。「連濁」は空見出しで「濁音」「連声」を参照させる。「濁音」の項目中に小項目「本濁と新濁及び連濁」あり。増補改訂版第4巻は1950年刊。

1935.11 菊沢李生

『国語音韻論』（賢文館） ☆「連濁現象」…p. 70. 72. 74. 76。

1938.5.13 金田一京助

『新訂増補国語音韻論』（刀江書院） ☆旧版は1932年3月。「連濁」… p. 111. 154. 185 「連濁の拒否」…p. 179。

1939.4 高橋正郎

「濁音節に現れる撥音便と鼻音(上)」『国学院雑誌』45-4（国学院大学） pp. 8-26

1939.5.10 橘 純一

「連濁によるジヂ・ズヅの仮名遣 某大学予科の入学試験国語答案所感」『国語解釈』4-5（瑞穂書院） pp. 13-16

1939.7 高橋正郎

「濁音節に現れる撥音便と鼻音(下)」『国学院雑誌』45-7（国学院大学） pp. 29-58

1950.8.25 橋本進吉

「濁音」『国語音韻の研究』（岩波書店） pp. 282-283 ☆橋本進吉（1933）を再録。

## 1951～1960

1951.6 今泉忠義

「日葡辞書を通じて見た字音と語法」『国語学』6（国語学会）

1952.6.15 奥村三雄

「字音の連濁について」『国語国文』21-5（京都大学文学部国語国文学研究室） pp. 9-22

1952.4.15 濱田 敦

「撥音と濁音の相関性の問題—古代語における濁子音の音価—」『国語国文』21-3（京都大学国語国文学研究室） pp. 18-32 ☆濱田敦（1984）に再録。

1952 Martin, Samuel

“Moprphophonemics of Standard Collouial Japanese” Language Supplement. Lan-

- guage Dissertation No.47 (The Linguistic Society of America) ☆菊田紀郎 (1971)  
に部分訳あり。
- 1954.2 無署名  
「音韻の変化と連濁」『ことば』2
- 1954.3.31 亀井 孝  
「書評・紹介 大野晋：上代仮名遣の研究——日本書紀の仮名を中心として」『言語研究』  
25 (日本言語学会) pp. 67-77
- 1954.12.25 村山七郎  
「連濁について」『言語研究』26・27合号 (日本言語学会) pp. 106-110 ☆ p. 107「連  
濁は、日本語において、有声～無声が語頭に立ち得た時代の名残と解されないだろうか」。
- 1954 Gunther Wenck  
Japanische Phonetik (Otto Harrassowitz, Wiesbaden) ☆ BAND I § 120 (pp. 77-  
78)に連濁に関する記述。
- 1955.5.5 福永静哉  
「音読漢文に於ける連濁の法則」『京都女子大学紀要 (文学部)』10 (京都女子大学)  
pp. 72-88
- 1955.4.1 颯田琴次  
「ダンスとダンス」『言語生活』4 (筑摩書房) pp. 70-71
- 1955.7.25 有坂秀世  
『上代音韻攷』(三省堂) ☆連濁…pp. 367-369 p. 727。
- 1955.8.20 奥村三雄  
「連濁」の項目 国語学会編『国語学辞典』(東京堂出版) pp. 961-962
- 1957.6 服部四郎  
「音韻論(3)」『国語学』29 (国語学会) ☆服部四郎(1960)に再録。
- 1958.10.1 野元菊雄  
「国語音韻の特色」『国語教育のための国語講座2 音声の理論と教育』(朝倉書店)  
pp. 49-102 ☆ p. 80連濁とその法則。p. 82助数詞の連濁。p. 82ハ行の連濁。
- 1959.5.1 福永静哉  
「同一経典に於ける字音連濁現象の変遷」『女子大國文』13 (京都女子大学国文学会)  
pp. 42-45 ☆福永静哉(1963)に改稿のうえ再録。
- 1959.6.15 近藤政美  
「まらうど考 平家正節における〔一ヒト〕,〔ビト〕の音便形の最後のモーラの清濁につ  
いて」『名古屋大学 国語国文学』第2号 (名古屋大学国語国文学会) pp. 67-73 ☆  
マラウト>マロードは仲人(ナコード)などへの類推による形態上の変化。
- 1959.12.13 河野 亮

「羅葡日対訳辞書の日本語—今日と清濁を異にせる—」『音声学会会報』101（日本音声学会） pp. 1-5+p. 7

1960.10.1 濱田 敦

「音韻史」『国語と国文学』37-10（東京大学国語国文学会） pp. 17-28 ☆濱田敦（1984）に再録。

1960.10 濱田 敦

「連濁と連声—同化の問題—」『国語国文』29-10(通巻311号)（京都大学文学部国語国文学研究室） pp. 1-16 ☆に再録。p. 7「日本語において、「清濁」が音韻論的対立として確立する過程において、一種の過渡的、乃至中世的現象として生じたものが、この「連濁」であろうと思う」。濱田敦（1984）に再録。

1960.12.24 服部四郎

『言語学の方法』（岩波書店） ☆服部四郎（1957）を再録。

### 1961～1970

1962.10.31 鈴木孝夫

「音韻交替と意義分化の関係について—所謂清濁音の対立を中心として—」『言語研究』42（日本言語学会） pp. 20-30 ☆p. 30は英文要旨。『日本の言語学第1巻 言語の本質と機能』（1980年、大修館書店）、鈴木孝夫（1999）に再録。

1962.9.20 大野 透

『万葉仮名の研究』（明治書院） ☆1977.3高山本店から新訂版。

1962.5.31 森山 隆

「連濁——上代語における」『語文研究』第14号（九州大学文学部） pp. 1-10 ☆森山隆（1971）に改題のうえ再録。

1963.10 福永静哉

『浄土真宗伝承音の研究』（風間書房） pp. 181-264 第七章連濁。☆福永静哉（1959）を改稿のうえ再録。

1963.9.25 無署名

『日本語の歴史1 民族のことばの誕生』（平凡社） ☆「連濁」…p. 299。

1964.7 奥村三雄

「生ずると称する—連濁の要因について—」『国語国文学』3（岐阜大学国語国文学会） pp. 1-8

1964.9. 鈴木一男

「「鑑真和上」の呼称について—一字音語の清濁小論—」『南都仏教』15（南都仏教研究会）

1964.12.5 鈴木一男

「奈良時代の年号「天平」の読み方試論」『大和文化研究』9-12（大和文化研究会） pp.

- 1-12
- 1965.6.1 杉藤美代子  
「柴田さんと島田さん一単語の聴覚的弁別についての一考察」『言語生活』165号（筑摩書房） pp. 64-72 ☆杉藤美代子（1981）に改題のうえ再録。
- 1966.3.3 北条忠雄  
『上代東国方言の研究』（日本学術振興会） ☆ pp. 279-324…「第五篇音韻論 【一】濁音論（一）濁音表記（二）連濁現象（1）付属語の語頭濁音（2）複合語に於ける連濁現象」
- 1966.3.5 無署名  
「発音ノ「ユレ」と表記法(1)」『カナノヒカリ』525（カナモジカイ） pp. 10-13
- 1966.3 飛田良文  
「明治大正時代における漢語の連濁現象」『日本文化研究所研究報告』2（東北大学） pp. 251-266 ☆語形変化一覧表(I)(II)あり。飛田良文（1992）に再録。
- 1966.4.5 無署名  
「発音ノ「ユレ」と表記法(2)」『カナノヒカリ』526（カナモジカイ） pp. 8-11
- 1966.5 遠藤邦基  
「連濁語のゆれ」『国語国文』35-5(遠藤博士還暦記念 国語学論集)（京都大学国語国文学研究室） pp. 68-79
- 1966.6.6 亀井孝・他  
『日本語の歴史 別巻 言語史研究入門』（平凡社） ☆亀井孝は編者の一人。
- 1966.6.25 中川芳雄  
「連濁・連清(仮称)の系譜」『国語国文』35-6(通巻382号)（京都大学国語国文学研究室） pp. 302-314
- 1966.8. 桜井茂治  
「共通語の発音で注意すべきことから」日本放送協会編『日本語 発音アクセント辞典』（日本放送出版協会） ☆「第3章 連濁について」。改訂新版は1985年。
- 1967.3 森山 隆  
「上代における不連濁語の周辺」『言語科学』3（九州大学教養部言語研究会） pp. 15-24 ☆森山隆（1971）に第「七章第二部 不連濁語の存在とその意義」として再録。
- 1967.7.10 丸山林平  
「連濁について」『上代語辞典』（明治書院） p. 1124
- 1967.12.10 無署名  
「上代語概説 第二章 文字および音韻 五 音節の結合」『時代別国語大辞典 上代篇』（三省堂） pp. 30-32 ☆ p. 31「前項末尾が濁音節であれば連濁しにくい傾向があったようである」。
- 1967.3.25 桜井茂治

- 「音韻資料としての『補忘記』—注記の分類と検討—(上)」『国語国文』36-3 (京都大学国語国文学研究室) pp. 35-57
- 1967.4.25 桜井茂治  
「音韻資料としての『補忘記』—注記の分類と検討—(下)」『国語国文』36-4 (京都大学国語国文学研究室) pp. 15-49
- 1968.4.10 今泉忠義  
『日葡辞書の研究 音韻』(桜楓社) ☆ pp. 27-53…一音韻(三)連濁
- 1968 MacCawley, James D.  
The Phonological Component of a Grammar of Japanese (Mouton, The Hague)
- 1970.3.31 亀井 孝  
「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったか——をめぐってかたる」『一橋大学研究年報人文科学研究』12 (一橋大学) pp. 1-92 ☆濁音はプロソデーム・アクセント。亀井孝(1986)に再録。
- 1970.3 小林芳規  
「院政鎌倉時代における字音の連濁について」『広島大学文学部紀要(日本・東洋)』29-1 (広島大学) pp. 1-35
- 1970.5.1 伊丹 昇  
「清濁について」『解釈』16-5 (解釈学会) pp. 16-22
- 1971～1980**
- 1971.1.20 中川芳雄  
「イリクチとイリグチ」『講座正しい日本語 第2巻 発音編』(明治書院) pp. 147-158 ☆連濁形と連清形。「口を修飾してできている他の類縁語」の連濁・非連濁。
- 1971.1.15 森山 隆  
『上代国語音韻の研究』(桜楓社) pp. 279-295 pp. 296-312 ☆森山隆(1962)を「第七章 連濁現象の意味論的性格」の「第一節 上代における連濁現象の実態」, (1967)を「第二節 不連濁語の存在とその意義」と改題のうえ再録。
- 1971.3 小林芳規  
「中世片仮名文の研究」『広島大学文学部紀要』30—特輯号3 (広島大学文学部) pp. 1-182
- 1971.3.25 森山 隆  
「上代における動詞の連濁について(一)」『文学論輯』18 (九州大学教養部) pp. 35-48 ☆森山隆(1986)に「上代における動詞の連濁について」として再録。
- 1971.4.30 馬淵和夫  
『国語音韻論』(笠間書院) ☆ p. 35「これによると、日本音の濁音を表わすにはかなら

- ず鼻音性の音 (ng n n m) が主用され、有声音は清濁の両方に用いられて、はっきりしない。これによると、上代の日本人が濁音と聞いたものは、鼻音であったのではないと思われる」。pp. 126-128室町時代の濁音。
- 1971.5.1 菊田紀郎  
「用言の連濁の一要因」『解釈』17-5 (解釈学会) pp. 24-29 ☆ p. 25「資料としては、パジェス日仏辞典を使用し、全用例について日葡辞書と比較した」。Martin Samuel (1952) の部分訳あり。
- 1971.7.1 田村すゞ子  
「合成語に見られる音素交替」『講座日本語教育』第八分冊 (早稲田大学語学教育研究所) pp. 116-144 ☆『明解日本語アクセント辞典』(三省堂) を資料として、連濁に関する研究方法の実際を示す。
- 1971.11.25 濱田 敦  
「清濁」『国語国文』40-11 (京都大学文学部国語国文学研究室) ☆浜田敦 (1983) に再録。
- 1971 丸山林平  
「上代語の清濁に関する研究」『静岡英和女学院短期大学紀要』3 (静岡英和女学院短期大学)
- 1972.1.20 沼本克明  
「日本漢字音に於ける連濁と声調との関係」『広島大学文学部紀要』31-1 (広島大学文学部) pp. 94-115 ☆ p. 96「連濁符」。沼本克明 (1982) に再録。
- 1972.2.1 五十郎  
「日本語横町(9) 清濁」『国文学解釈と鑑賞』37-2 (至文堂) pp. 202-203
- 1972.3 小島正敏  
「万葉集の連濁 第二部 (その2)」『神戸女子短大論攷 (文科篇)』17 (神戸女子短期大学) pp. 94-115
- 1972.6.25 桜井茂治  
「平安院政時代における和語の連濁について一観智院本・名義抄における一」『国語国文』41-6 (京都大学文学部国語国文学研究室) pp. 1-19 p. 56 ☆非連濁の条件の一つとして連濁該当音節の直後・直前の鼻音をあげる。
- 1972.9. 木村秀次  
「中世の漢語の清濁について」『漢字漢文』4-11 (全国漢字漢文教育研究会)
- 1972 Ramsey, R. S. and Unger  
“Evidence for a consonant shift un 7th century Japanese” *Papers in Japanese Linguistics* 1 pp. 278-295
- 1973.4.25 村山七郎・大林太良

- 『日本語の起源』（弘文堂） ☆ p. 210 「…かつて私は、連濁の起源をアルタイ的と見ていましたが、連濁の現象も、南島語からうけついだものではなかろうかと今は考えておりません。連濁をひきおこす連辞\*nが考えられるのではないのでしょうか」
- 1973.12.25 沼本克明  
「漢音の連濁」『国語国文』42-12（京都大学文学部国語国文学研究室） pp. 26-43 ☆  
沼本克明（1982）に再録。
- 1973.12.31 小松代融一  
「国語問題僻見録 下（主に連濁・訛濁について）」『岩手医科大学教養部研究年報』8  
（岩手医科大学） pp. 144-131（縦書 pp. 1-14）
- 1974.3.25 平野尊識  
「連濁の規則性と起源」『文学研究』71（九州大学文学部） pp. 21-43 ☆ p. 76「連濁の起源がタガログ語に見られるような ligature に求めることができる」とする。
- 1974.3. 森田 武  
「日葡辞書を通して見た語音連結上の一傾向」『国語学』96（国語学会） ☆国語学会中  
四国支部大会研究発表要旨（昭和48・12・8～9山口女子短期大学）
- 1976.3 秋永一枝  
『日本国語大辞典における〈語音の歴史〉等覚え書』（萩亭書屋） ☆私家版。
- 1976.3.5 田村すゝ子・徐炎山・ズアマリオン・新川スーザン  
「合成名詞の連濁（カで始まる和語について）—語研日本語研修「言語学」の実習から—」  
『ILT NEWS』59・60合号（早稲田大学語学研究所） pp. 24-41
- 1976.6.15 無署名  
「連濁」の項目 日本音声学会編『音声学大辞典』（三修社） pp. 832-833 ☆小松代融  
一氏執筆。
- 1976.6.1 北条忠雄  
「古典語における清濁の弁—正しく的確な読解のために—」『解釈』22-6（解釈学会）  
pp. 36-43
- 1976.7.15 E. D. ポリワーノフ  
『日本語研究』（弘文堂） ☆村山七郎編訳。原著は1914～1925頃の執筆。
- 1976.10 犬飼 隆  
「『濁音』専用の万葉仮名」の機能を考える」『言語と文芸』83（桜楓社） pp. 128-149  
☆ p. 148「〈濁〉は『連続』表示」という認識。犬飼隆（1992）に改稿のうえ再録。
- 1976.11 齋賀秀夫  
「日本語の正誤(7) 音の転倒か連濁か」『広報』277
- 1976 金田一春彦  
「連濁の解」Sophia Linguistica II（上智大学大学院言語学研究室） pp. 1-22 ☆ロド

リゲス・石原正明・ライマン・奥村三雄・中川芳雄の連濁論。「連濁が盛んだった時代」を想定する。p. 22は英文要旨。p. 21に乱脱あり。金田一春彦（2001）・（2005）に再録。

1977.3.1 大野 透

『続万葉仮名の研究』（高山本店）

1977.3.30 森田 武

「日葡辞書に見える語音連結上の一傾向」『国語学』108（国語学会）pp. 20-32 ☆単純語中に濁音節は並列しない。p. 31「語音連結上のきまりとして、古く語頭に濁音・ラ行音が立たず、語中に母音が並列しないことなどが知られているが、濁音節が並列しないということも認められるのではなかろうか」。後に遠藤邦基（1981）により「濁音並列忌避の法則」と命名される。

1977.6.1 北条忠雄

「古典語における清濁の弁」『解釈』22-6（解釈学会）pp. 36-43

1977.8.26 早田輝洋

「生成アクセント論」『岩波講座日本語 5 音韻』（岩波書店）pp. 323-360 ☆pp. 359-360の注(38)に「私は語中の清子音は、ハ行子音に限らず一般に有声音的であったと考えている。したがって、非鳴音の清濁の対立は無声／有聲ではなく、非鳴音／鼻音と考える」とある。

1977.11.10 馬淵和夫

「国語の「清濁」」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』（明治書院）pp. 257-273 ☆馬淵和夫（1996）に再録。

1977.11.5 前田富祺

「連濁」の項目 佐藤喜代治編『国語学研究事典』（明治書院）p. 68 ☆「事項編 一、理論・一般」の部。

1977.11.5 菊田紀郎

「連濁」の項目『国語学研究事典』（明治書院）p. 246 ☆「事項編 二、国語史」の部

1977.11.15 秋永一枝

「姫考—連濁をめぐる—」『平安朝文学の諸問題』岡一男先生喜寿記念論集 笠間叢書 83（平安朝文学研究会編 笠間書院）pp. 369-388 ☆p. 384「連濁が規則的に行われた時期に強く複合してきかどうかが連濁・非連濁を決定する用意のようである」。

1977.12.25 犬飼 隆

「古代語の「濁」拍について—観智院本類聚名義抄の複声点付和訓を中心に—」『学習院女子短期大学紀要』15（学習院女子短期大学）縦書 pp. 62-76 ☆「プロソディーム」。犬飼隆（1992）に発展的に取り込まれる。

1977.12 秋永一枝

「松原と柳原—ハ行転呼を中心に—」『国語学』111（国語学会）pp. 62-76 ☆鼻音節

の連続回避・濁音節の連続回避 p. 65 「上代においては濁音並列回避は単純語ばかりでなく複合語の接合部にもみられるもので、後者の制約が弱まり初めるのは、平安中期以降であろう。それは正しく、ハ行転呼現象及び音便現象の初まりと時を同じくし、語頭濁音の発達等と並行する」。p. 75 「複合語における連濁とハ行転呼は、お互いの領分をおかさず、いわば連濁現象のすきまにハ行転呼現象が入りこんだ形であり、個々の語の発生と使用傾向に密接な関係がある」。

1978.2.25 中川芳雄

「連濁涵精(上)」『国語国文』47-2 (京都大学文学部国語国文学研究室) pp. 34-56

1978.3.25 中川芳雄

「連濁涵精(下)」『国語国文』47-3 (京都大学文学部国語国文学研究室) pp. 41-58

1978.12 木部暢子

「形態アクセント論的一考察—複合語アクセントと語構成・連濁をめぐって」『語文研究』46 (九州大学文学部) pp. 41-49

1978.3.30 木田章義

「濁音史摘要」『論集 日本文学・日本語 I 上代』(角川書店) pp. 285-306

1979.3.20 中川芳雄

「固有名詞の連濁・連清の系譜」『静岡女子大学研究紀要』12 (静岡女子大学) pp. 302-288 (縦書 pp. 1-15) ☆『静岡女子大学国文研究』所載論文と同じもの。

1979.3.31 中川芳雄

「固有名詞の連濁・連清の系譜」『静岡女子大学国文研究』12 (静岡女子大学国語国文学会) pp. 1-15 ☆『静岡女子大学研究紀要』の別刷。

1979.3.25 木田章義

「連濁とアクセント」『国語国文』48-3 (京都大学文学部国語国文学研究室) pp. 51-64 ☆ p. 60 「濁音がプロソデムのレベルから音韻のレベルに移る」。

1979.6 Vance, Timothy J.

*Nonsense-word Experiment in Phonology and Their Application to Rendaku in Japanese*, doctoral dissertation, University of Chicago (THE UNIVERSITY OF CHICAGO) ☆ A4 版約190ページ。

1979.9.25 西田直敏

「連濁」の項目 林巨樹・池上秋彦編『国語史辞典』(東京堂) pp. 379-380

1979.12.5 木部暢子

「『日葡辞書』の連濁について」『文献探究』5 (文献探究編集部) pp. 6-13 ☆非連濁形を作る前部成素の例を『日葡辞書』から挙げる。

1979.12. 増田 豊

「日本語連音変化の音韻規則—連濁について(語学文学編)—」『人間と社会の諸問題 新

制三十周年記念論文集』（鈴木茂・他編 松山商科大学）

1980.3.26 木田章義

「その後の〈連濁とアクセント〉」『梅花女子大学開学十五周年記念論文集（国語・国文学）』（梅花女子大学） pp. 25-44 ☆ p. 38…「配す」「関す」など「●○○型に連濁形がないというのは、●○○型へのアクセントの変化を契機として、連濁現象が消滅して行ったことを示している」

1980.5.25 小倉進平

「国語の連濁音」『小倉進平博士著作集(四)』（京都大学国文学会） pp. 270-305 ☆小倉進平（1920）の再録。

1980.9. 奥村三雄

「連濁」の項目『国語学大辞典』（東京堂出版） pp. 925-926 ☆「術語」・「連濁の条件」・「変遷」。

1980.10.1 森重 敏

「まらひと（賓客）まればと（稀人）まろがち（忠僕）」『叙説』55（奈良女子大学国語国文学研究室） pp. 1-9

1980.10 柏谷嘉弘

「山家本法華経の連濁」『訓点語と訓点資料』（訓点語学会） pp. 85-94

1980 Otu Yukiko

“Some Aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems” A. Farmer and Y. Ots (eds.) *Theoretical Issues in Japanese Linguistics* (MIT Working Papers in Linguistics 2) (Department of Linguistics and Philosophy Cambridge Massachusetts) pp. 207-227 ☆ p. 218 「ニセタヌキジル」と「ニセダヌキジル」。

1980 Timothy J. Vance

“Comments on ‘Some Aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems’” A. Farmer and Y. Ots (eds.) *Theoretical Issues in Japanese Linguistics* (MIT Working Papers in Linguistics 2) (Department of Linguistics and Philosophy Cambridge Massachusetts) pp. 229-235 ☆ Otu Yukio (1980) への批判的コメントを多く含む。

1980 Timothy J. Vance

“The Psychological Status of a Constraint of Japanese Consonant Alternation” *Linguistics* 18-3 pp. 245-267

## 1981～1990

1981.1.20 小松英雄

「第四章 清濁のしくみ」〈日本語の世界〉『日本語の音韻』（中央公論社） pp. 101-130

1981.3 遠藤邦基

「非連濁の法則の消長とその意味—濁子音と鼻音との関係から—」『国語国文』50-3（京都大学文学部国語国文学研究室） pp. 38-54 ☆ p. 38「ライマンの法則」を「連濁拒否の法則」、上代における「濁音並列忌避の傾向」を「濁音並列忌避の法則」と称する。p. 40に上代複合語中における濁音連続の例あり。遠藤邦基（1989）に改題のうえ再録。

1981.4.20 亀井 孝

「連濁」『世界大百科事典』32（平凡社） p. 270

1981.10.1 福島邦道

「ラウシヤカロウシヤカロウジヤカ」『実践国文学』20（実践国文学会） pp. 1-12

1982.2 杉藤美代子

「語音とアクセントとの関連—柴田さんと島田さん—」『日本語アクセントの研究』（三省堂） ☆杉藤美代子（1965）を改題のうえ再録。

1982.3.20 沼本克明

『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院） ☆沼本克明（1972）・（1973）を再録。

1982.3.20 遠藤邦基

「古今訓点抄の濁音—「読み癖」の解釈を通して—」『奈良女子大学文学部研究年報』25（奈良女子大学） pp. 1-16 ☆遠藤邦基（1989）を改題のうえ再録。p. 13「連濁が体系的現象であった時代」「作動的な連濁形」。

1982.5.10 大坪一夫

「連濁」の項目 日本語教育学会編『日本語教育事典』（大修館書店） pp. 50-51

1982.7.25 山口佳紀

「語形・語構成」『講座日本語の語彙1 語彙原論』（明治書院） pp. 25-48

1982 Timothy J. Vance

“On the Origin of Voicing Alternation in Japanese Consonant” *Journal of the American Oriental Society* 102（The American Oriental Society） pp. 333-341

1982 Sano M.

“Rendaku in Japanese” *Tsukuba English Studies* 1（Tsukuba University） pp. 41-67

1983.7. 木村秀次

「『日葡辞書』における漢語のゆれ—「A.1 b」の形の場合」『国文学言語と文芸』94（桜楓社）

1983.8.25 濱田 敦

『續朝鮮資料による日本語研究』（臨川書店） pp. 126-140 ☆濱田敦（1971）を再録。

1983 佐藤大和

「連濁の分析と規則化の検討」『日本音声学会講演論文集』1-2-10（日本音声学会） pp.

- 61-62
- 1984.3 登坂俊子  
「現代語における連濁とアクセント」『国語国文論集』13（学習院女子短期大学国語国文学会） pp. 81-89
- 1984.3 福田昆之  
「古事記歌謡における連濁現象の考察 正」『言語と言語学』10（FLL） pp. 3-5
- 1984.5.10 奥村三雄  
「連濁」『日本語学』3-5（明治書院） pp. 89-98 ☆連濁の条件を網羅。
- 1984.5 遠藤邦基  
「「よみくせ」と連濁—「源氏清濁」の畳語を中心に—」『国語語彙史の研究』五（国語語彙史研究会編 和泉書院） ☆遠藤邦基（1989）に改題のうえ再録。
- 1984.8.30 濱田 敦  
『日本語の史的研究』（臨川書店） ☆濱田敦（1952）・（1960a）・（1960b）を再録。
- 1984.8 福田昆之  
「古事記歌謡における連濁現象の考察 補」『言語と言語学』11（FLL） pp. 3-4
- 1984.11. 崔 殷嬾  
「複合語의連濁現象에關한研究—品詞를中心으로」『日本学報』13（韓国日本学会） pp. 95-135
- 1984.12 福田昆之  
「古事記歌謡における連濁現象の考察 補の2」『言語と言語学』15（FLL） pp. 9-10
- 1984.12 福田昆之  
「古事記歌謡における連濁現象の考察 補の3」『言語と言語学』16（FLL） p. 11
- 1985.5 森田 武  
『室町時代語論攷』（三省堂） ☆森田武（1977）を再録。
- 1985.6.10 桜井茂治  
「共通語の発音で注意すべきことがら」NHK編『日本語 発音アクセント辞典 改訂新版』（日本放送出版協会） pp. 128-134 ☆「第3章 連濁について」。初版は1966年。
- 1986.5 崔 殷嬾  
「複合語 連濁現象의 音韻論的 分析」『日本学報』16（韓国日本学会） pp. 125-143
1986. Winter Junko Itô & Ralf-Armin Mester  
“The Phonology of Voicing in Japanese: Theoretical Consequences for Morphological Accessibility” *Linguistic Inquiry* 17-1（MIT press） pp. 49-73
- 1986.6.25 沼本克明  
『日本漢字音の歴史』（国語学叢書10 東京堂出版） ☆連濁…p. 7 p. 243 pp. 245-249 新濁…p. 246

- 1986.8.10 亀井 孝  
『言語文化くさぐさ』（亀井孝論文集5 吉川弘文館） pp. 63-150 ☆亀井孝（1970）を再録。p. 150は補記。
- 1986.11.1 森山 隆  
『上代国語の研究—音韻と表記の諸問題—』（桜楓社） pp. 148-163 ☆森山隆（1971）を「上代における動詞の連濁について」として再録。
- 1987.3.20 塩田 昇  
「連濁について——その共時的研究の可能性を探る」『英語英文学研究』第20号（第11巻第1号）（創価大学英文学会） pp. 33-40 ☆p.92英文要旨。
- 1987.12.25 榎木久薫  
「光明真言土沙勸信記における字音の清濁について—連濁に関する考察を中心として—」『東洋大学短期大学紀要』第19号（東洋大学短期大学） pp. 69-79
- 1987 Timothy J. Vance  
*An Introduction to Japanese Phonology* (New York: SUNY Press) ☆ pp. 133-148…  
Chapter 10 SEQUENTIAL VOICING 10.1. Historical Background 10.2. Conditioning Factors 10.3. Fundamental Irregularity 10.4. Variation
- 1987 Samuel E. Martin  
*The Japanese Language Through Time* (YALE UNIVERSITY PRESS) ☆ Chaptr  
1.25. Sequential voicing (rendaku) pp. 26-29 Chapter 2. §3. Acquired voicing in compounds: rendaku §5. Rendaku in later Japanese p.84-120
- 1988.3.20 戸田綾子  
「和語の非連濁規則と連濁傾向—「日葡辞書」と「和英語林集成」から—」『同志社国文学』30（同志社大学国文学会） pp. 1-17 ☆二辞書の連濁率の比較。
- 1988.5.10 山口佳紀  
「古代語の複合語に関する—考察—連濁をめぐる—」『日本語学』7-5（明治書院） pp. 4-12 ☆p. 8「単純語中に濁音が並列しないというのは確かであるが、これをもう一つ大きな視点から捉え直すと、単純語中に濁音は共存しないと言い換えることが出来る」
- 1988.11.1 沼本克明  
「連濁」の項目『日本大百科全書』24巻（小学館） p. 442
- 1989.5.30 佐藤大和  
「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子編『日本語の音声・音韻(上)』講座日本語と日本語教育 第2巻（明治書院） pp. 233-265 ☆p. 256「図4 造語成分「所」の連濁規則」。
- 1989.7.15 遠藤邦基  
「上代濁音の音価推定」『国語表現と音韻現象』第一章（新典社） pp. 41-66 ☆遠藤邦

- 基 (1981) を改題したもの。
- 1989.7.15 遠藤邦基  
「古今読解と濁音解釈」『国語表現と音韻現象』第四章 (新典社) pp. 285-304 ☆遠藤邦基 (1982) を改題したもの。
- 1989.7.15 遠藤邦基  
「源氏置語と連濁読癖」『国語表現と音韻現象』第四章 (新典社) pp. 328-424 ☆遠藤邦基 (1984) を改題したもの。
- 1989.7.31 川原悦子  
「中世を中心とした和語の非連濁一主として『類聚名義抄』・『古本節用集』における一」『古典研究』16 (ノートルダム清心女子大学国語国文学科) pp. 115-123
- 1989.9.10 山口佳紀  
「日本語 (歴史 音韻) [連濁]」『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』(三省堂) ☆『日本列島の言語』(1997.1 三省堂)に再録。
- 1989.9.10 亀井 孝  
「日本語 (歴史) 4) 平安・鎌倉時代 b) 清濁の別」『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』(三省堂) pp. 1599-1603 ☆『日本列島の言語』(1997.1 三省堂)に再録。
- 1989.12 Takatsugu Oyakawa  
“Some Remarks on Japanese Rendaku (1)”『琉球大学語学文学論集』34 (琉球大学法文学部) pp. 1-24 ☆親川孝次「日本語の連濁現象における諸問題の再考(1)」(和文タイトルは pp. 23-24の論文要約による)。
- 1989.6.3 迫野虔徳  
「撥音の後のバ行音-P音の発生と展開一」『奥村三雄教授退官記念国語学論集』(桜楓社) pp. 817-831 ☆迫野虔徳 (1998) に改題のうえ再録。
- 1989 Mester, R. Armin, and Junko Itô  
“Feature predicatability and underspecification: Palatal prosody in Japanese mimetics” *Language* 65 pp. 258-293
- 1990.1.31 西宮一民  
「ことばの清(ス)む・濁(ニゴ)る」『皇学館大学国文学会会報』第18号 (皇学館大学国文学会) pp. 1-3
- 1990.2.9 川上 蓁  
「昔の清音, 濁音」『国語研究』53 (国学院大学国語研究会) pp. 41-67 ☆p. 41「この小論は, 音便や連濁の現象を手がかりにして往時の清音, 濁音の実態を探ろうとするものである」。p. 46語中「か・さ・た・は」行子音有声説と無声説。
- 1990.3.1 田野村忠温  
「現代日本語の教詞と助教詞一形態の経理と実態調査一」『奈良大学紀要』18 (奈良大

学) pp. 194-216 ☆撥音で終わる数詞(「さん」「よん」「せん」「まん」)に助数詞が付くとき濁音化する率。

1990.6.30 小倉 肇

「【特集一昭和63年・平成元年における国語学会の展望】音韻(史的研究)14連濁」『国語学』161(国語学会) p. 56 ☆山口佳紀(1988)に対する批評が中心。

1990.7.1 最上勝也

「放送のことば「干しいたけ」と「辛しじょうゆ」—「連濁のゆれ」100人アンケートから—」『放送研究と調査』40-7(NHK総合放送文化研究所) pp. 49-51

1990.10.1 最上勝也

「放送のことば「連濁のゆれ」100人アンケートから・その2」『放送研究と調査』40-10(NHK総合放送文化研究) pp. 36-37

### 1991~2000

1991.3.31 迫野虔徳

「「中濁」考」『文学研究』88(九州大学文学部) pp. 1-20 ☆語中のカ行・タ行の有声化現象を反映する京都大学付属図書館蔵『運歩色葉集』。迫野虔徳(1998)に再録。

1991.5.17 松浦陽子

「字音語における連濁現象の一考察—『日葡辞書』を中心として—」『国語学会平成三年春季大会要旨』(国語学会) pp. 57-62 ☆1991.5.26発表。

1991.11.1 屋名池誠

「〈ライマン氏の連濁論〉原論文とその著者について 付.連濁論原論文「日本語の連濁」全訳」『百舌鳥国文』11(大阪女子大学大学院国語国文学専攻院生の会) pp. 94-63(横組 pp. 1-63) ☆「ライマン年譜 ライマン日本関係著作目録」を付す。

1991 Cook, Eung-Do

““Rendaku”(Japanese) and Sai-sois(Korean): Are the Similarities Fortuitous and Spurious?” *Harvard Studies in Korean Linguistics IV* (Kuno et. al. eds. University of Calgary) pp. 3-12

1992.2.29 犬飼 隆

『上代文字言語の研究』(笠間書院) ☆犬飼隆(1976)を改稿のうえ取り込み,(1977)を改稿のうえ再録。

1992.3.25 高山倫明

「連濁と連声濁」『訓点語と訓点資料』88(訓点語学会) pp. 115-124 ☆「6 連濁の発生についての諸説」など。

1992.3 豊島正之

「〈AWK(オーク)で探るに日本語の風景①〉濁音法則」『三省堂ぶっくれっと』97(三

- 省堂) pp. 84-89 ☆「濁音は(ストレス)アクセントである」。亀井孝(1970)を参照。
- 1992.5 豊島正之  
 「<AWK(オーク)で探るに日本語の風景②> 清濁」『三省堂ぶっくれっと』98 (三省堂)  
 pp. 94-100 ☆清濁弁別のメルクマールが前鼻音(鼻母音)から有声に変わったのは江戸時代初。その一つの証拠が狭母音の無声化。宮島達夫(1961)を参照。
- 1992.7. 金田一京助  
 『金田一京助全集』第2巻 (三省堂) ☆金田一京助(1932)を再録。
- 1992.8 田野村忠温  
 「「さんがい(三階)」と「よんかい(四階)」」『いずみ通信』16 (和泉書院) pp. 10-11
- 1992.9.30 無署名  
 「連濁」の項目 野村雅昭・小池清治編『日本語事典』(東京堂出版) pp. 229-230
- 1992.10.20 高山倫明  
 「清濁小考」『日本語論究2 古典日本語と辞書』(明治書院) 横組 pp. 17-56  
 ☆ p. 49「古代的清濁の弁別特徴を中心に、早田説の驥尾に付して私見を述べてきた」
- 1992.11.15 蜂矢真郷  
 「ク型動詞とグ型動詞(上)」『国語国文学 ことばとことのは』9 (和泉書院) pp. 118-126 ☆ p. 118「山口氏が…「連濁拒否の法則」すなわちいわゆる「ライマンの法則」、および森田武氏…が述べられる「濁音並列忌避の法則」を引かれた上で、「単純語中に濁音は共存しない」とされる問題である」。p. 119「「これを濁音共存忌避の法則」と呼び」p. 122「遠藤邦基氏「濁音減価の派生意識」が…語頭を濁音化…」
- 1992 飛田良文  
 「第三部 I 音韻 第五章 漢語の連濁現象」『東京語成立史の研究』(東京堂出版) ☆飛田良文(1966)を再録。
- 1993.3.25 鈴木 豊  
 「非連濁規則の機能について」(発表要旨)『早稲田日本語研究』1 (創刊号) (早稲田大学国語学会) pp. 54-55 ☆「(上代では)前部成素中の濁音は連濁を妨げる」の指摘。例外は東国方言のみ。1993年1月23日発表。
- 1993.4.1 小松英雄  
 「連濁」の項目『国史大辞典』第14巻 (吉川弘文館) p. 747
- 1993.12.15 蜂矢真郷  
 「ク型動詞とグ型動詞(下)」『国語国文学 ことばとことのは』10 (和泉書院) pp. 105-113
- 1993.12 江口泰生  
 「漢語連濁の一視点—貞享版『補忘記』における—」『国語国文』(京都大学国文学会) pp. 15-28

- 1993 松浦陽子  
「漢語連濁の史的 연구—「日葡辞書」と現代語辞書との比較の観点から—」『広島大学教育学部紀要 第二部』通号42 (広島大学教育学部) pp. 232-242
- 1993.3.30 Minoru Shimozaki  
“A Preliminary Study of Rendaku Voicing Alternations in Japanese Compounds”『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』11 (慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会) pp. 72-96
- 1994.3 戸田綾子  
「現代語における和語の連濁 (1) —複合形容詞の連濁—」『同志社国文学』40 (同社大学国文学会) pp. 172-159
- 1994.5.31 蜂矢真郷  
「～キと～ギ」『万葉』150 (万葉学会) pp. 1-36 ☆ p. 5「濁音並列忌避の法則」「濁音共存忌避の法則」の注 (12) (13) に呼称の由來說明あり。
- 1994.10.1 高山知明  
「複合語における促音の挿入について—もうひとつの連濁—」『言語・文学・国語教育 森野宗明教授退官記念論集』(森野宗明教授退官記念論集編集委員会編 三省堂) pp. 347-360
- 1994.10.12 高山知明  
「複合における濁音挿入について」『国語学会平成6年度秋季大会要旨』(国語学会) pp. 125-132 ☆連濁と濁音配列規則。10月30日発表。
- 1994.3.25 江口泰生  
「連濁と語構造」『岡大國文論稿』22 (岡山大学文学部国語国文学研究室) pp. 375-366
- 1994 EUNJOO HAN  
“Prosodic Constituent Formation in Japanese Compounds” *Japanese/Korean Linguistics* 4 (STANFORD LINGUISTIC ASSOCIATION) pp. 461-474 ☆ pp. 466-469…  
「2.2 RENDAKU」
- 1995.10.1 松本 宙  
「第六章近代の音韻 四近代の連声・近代の連濁(二)連濁」佐藤武義編『概説 日本語の歴史』(朝倉書店) pp. 111-112
- 1995.5 窪菌晴夫  
『語形成と音韻構造』(くろしお出版)
- 1996.1.1 無署名  
「連濁」の項目 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第6巻 術語編』(三省堂) p. 1416
- 1996.9.1 早田輝洋

- 「上代日本語の音韻をめぐって(上)」『言語』25-9 (大修館書店) pp. 91-102 ☆ p. 94「筆者は、清濁の対立が鼻音性 [±nasal] の対立であったという点と、それ故に清子音が共鳴音間で有声に発音された、という二点を強く主張する者の一人である」
- 1996.11.15 太田 聡  
「連濁考」音韻論研究会編『音韻研究—理論と実践』音韻論研究会創立10周年記念論文集 (開拓社) pp. 99-100
- 1996.11.15 内海 淳  
「連濁は音韻規則か」音韻論研究会編『音韻研究—理論と実践』音韻論研究会創立10周年記念論文集 (開拓社) pp. 101-104
- 1996.12.10 馬淵和夫  
国語の「清濁」『国語史叢考』(笠間書院) pp. 194-200 ☆馬淵和夫(1977)を再録。
- 1996 宮良信詳  
「沖縄本島首里方言における複合語と連濁について」『言語研究』110 (日本言語学会) pp. 79-118
- 1996 Ito Junko & Mester, A.  
“Rendaku I: constraint Conjunction and the OCP” (Handout of talk presented at the Kobe Phonology Forum and at the Western Conference on Linguistics) ☆ Ito Junko & Mester, A. (1997) による。
- 1996 Vance, Timothy  
“Sequential Voicing in Sino-Japanese” *Journal of the Association of Teachers of Japanese* 30 pp. 22-43
- 1996 大津由紀雄  
「大きな太鼓は「おおだいこ」連濁のはなし①」『探検!ことばの世界』(NHK出版) pp.# 44-49 ☆『探検!ことばの世界』(2004 新版 ひつじ書房)に再録。
- 1996 大津由紀雄  
「「にせたぬきじる」と「にせだぬきじる」連濁のはなし②」『探検!ことばの世界』(NHK出版) pp. 50-55 ☆もと『探検!ことばの世界』(2004 新版 ひつじ書房)に再録。
- 1997.1.30 石倉俊一郎  
「連濁の一考察—近世海外資料を中心として—」『慶應義塾高等学校紀要』27 (慶應義塾高等学校) pp. 19-52 ☆『日葡辞書』の連濁。
- 1997.5 鈴木 豊  
「「連濁」の呼称が確立するまで—連濁研究前史—」 ☆※第144回近代語研究会発表資料。A3版5枚。
- 1997.7.20 菊池 悟